

平成24年度 第3回心理学教育FD/ICT活用研究委員会 議事概要

I. 日 時：平成22年8月24日(金) 午前10時から午後1時10分まで

II. 場 所：私立大学情報教育協会 事務局 会議室

III. 出席者：木村裕委員長、金子尚弘委員、今井久登委員、大島尚委員、中澤清委員
(事務局) 井端事務局長、森下主幹、松本職員

IV. 議事概要

「心理学教育における学士力の考察」に含まれる心理学の学士力に関する三つの到達目標それぞれ〔下記(1)〕について、および学士力到達目標全体〔下記(2)〕について、その必要性を示す簡潔な解説文の案を委員が分担し準備した。これらを吟味検討して文章を完成することが本日の課題であったが、まず前文として用いる学士力到達目標全体の解説文案〔下記(2)〕「心理学教育における学士力の考察について」を検討することとした。

以下は準備された三つの到達目標とそれぞれの解説文の案〔下記(1)〕、および前文となる到達目標全体に関する解説文の案〔下記(2)〕である。

(1) 心理学教育における三つの到達目標とそれぞれの解説文の案

到達目標1．人間の心や行動が、生物学的要因、個人的要因および社会・文化的要因の影響を受けていることを理解できる。については次の解説が添えられた。

〈解説文案〉 私たちは一般に、人間の心や行動の規定因を、個人的な経験則や素朴な直感に基づいて推測している。しかし心理学士は、客観的で論理的な人間理解の意義と重要性を認識し、生物としての人間、個として生きる人間、他者との関係性や社会・文化の下で生きる人間という偏りない幅広い視点から、人間の心や行動の規定因を説明できなければならない。そのために、心理学の基礎知識を幅広く身につけることが求められる。さらに、その知識を単なる机上の知識に留めることなく、生きた知識として、日常場面や社会生活における具体的な現象に当てはめ、説明できなければならない。

到達目標2．人間の心や行動に関わる現象の要因を科学的な手法を用いて明らかにできる。については次の解説が添えられた。

〈解説文案〉 心理学は人間の心や行動を科学的な手法を用いて明らかにすることを目指している。対象となる心や行動には、経験的に知られている要因だけではなく、道の要因が関わっていることが考えられる。この要因を明らかにするため、心理学士は心の仕組みや行動の原因を解き明かすことを目的とした計画的で適切な観察や調査、実験を実施できなければならない。得られたデータを適切な統計手法を用いて分析し、その結果を解釈して因果関係を説明する力が必要である。

到達目標3．心理学的理論や手法を自己および社会の諸現象の理解に応用できる。については次の解説が添えられた。

〈解説文案〉 多くの心理学関連学部学科では4年間の学習の総括として卒業論文を課し、学士力の担保としている。その作成過程では先行研究に基づいて人の行動や生活における問題を洗い出し、その原因を調査し、仮説を立てることから始まる。仮説を証明するために、これまで学んできた実験法や調査法を活用し、調査にあたっては学外のマンパワーを利用するなどして立案し、資料収集を行う。そして統計解析、行動分析、会話分析などを拠り所にし、意味のある結果を考察するという実証的な手続によっ

て進められる。学生はこの総合的な作業を通して4年間の学修の総括を行う。

このような総合的かつ自律的な作業は論理的な思考を養うだけではなく、自己ならびに社会の諸現象の理解を促す。そして自己理解からセルフ・イノベーションが促進され、人間力が涵養される。他者や異文化をしっかりと受容・理解できる人間力を活用し、摩擦のない平和な世界を生み出す力を持った人として社会に貢献できる。

(2) 「心理学教育における学士力の考察」に添える前文について

三つの到達目標から成る「心理学教育における学士力の考察」について、前文としてあらかじめ準備された粗案を検討し、改訂した。

次は粗案として用いた文案である。

「心理学を専門的に学修しようとする学生をどのような資質を備えた学士として社会に送り出すべきか、という視点から考察は進められた。

心理学は、心の科学、あるいは、行動の科学、と表現されることがあるが、まず人間の「心」と「行動」を説明できるための「科学的な手法を身につける」べき点が、学士力として求められる内容として取り上げられた。しかし、倫理性、公平性など人間の尊厳に関わる事項についてはすべての学問領域において学士力と関わっているとの考えに基づき、これらには言及しないこととした。

心と行動に関して正当な説明を行い、人々がそれを共有できるためには、心理学に関わる各種の基礎的な概念を理解した上で、①人間が動物として生物学的要因下にある個人であり、かつ社会的存在であること、文化的要因下にあることを認識することが最初に必要なことと考えられた。また、②種々のできごとの心理学的側面に関して科学的な視点からその要因について考察できることが求められるとされた。さらに、③心理学における各種理論や手法を実際に応用できることが期待されていることが確認された。

これらの目標に到達するためには、心理学教育における従来の授業の方法を改善する必要があると考えられた。すでに新しい試みは始められていると考えられるが、これまでの授業に見られる学生を受動的立場に置く教育方法は未だ色濃く残っているとの認識に基づいて、学生が自主的かつ能動的にテーマに取り組み、また研究チームに参加できる機会を、大学として準備すべきことが求められた。」

上記前文の粗案の検討において、次の①～⑫の事項が取り上げられ議論され、それら事項の趣旨を反映した前文を完成することとなった。

- ① 最初の文(二行分)は自明の内容であるので不要である。
- ② 最後の文(四行分)に含まれる学生の自主性や能動的取り組みに関する言及は一般論であるためここには必要ない。
- ③ また、大学への要請としての表現がここに示されているが、適切ではない。
- ④ 心理学は学問の多様な分野と密接な関わりを持っている。
- ⑤ 自己と社会における諸現象の理解のためには心理学的観点が必要である。
- ⑥ 人間の活動のあらゆる分野で心理学的知見が必要である。
- ⑦ 心理学は自己と社会、また、心と行動に関して根拠に基づく(evidence based)解明を求め続けている学問である。

- ⑧ 心理学は社会科学と自然科学の橋渡しとしての役割を担っている。
- ⑨ 普遍的な真実に到達するためには、個人的な経験や直感に基づく理解を避けた客観的で論理的な理解の仕方、が必要である。
- ⑩ 人間は、生物学的、個人的、社会・文化的な存在であり、その影響下にある。
- ⑪ 到達目標 3. を最終目標としそこに至る前段階として到達目標 1. と到達目標 2. が設定されている。
- ⑫ 心理学の知識と技能を理解し活用できることが心理学における学士力である。

上記①～⑫の趣旨を反映すべく検討の結果、次の案文を前文とすることとなった。

「心理学教育は、人の心と行動を科学的な手法を用いて明らかにし、自己および社会の諸現象と関連付けて応用できることを目指している。それゆえに、人間活動のあらゆる分野で心理学的な知見が必要であり、関連書科学との融合が期待される。

複雑な人間の心や行動を解明するには、個人的な経験や直感だけでは限界があり、真実に到達できない。このため心理学は、心の働きや行動の成り立ちを客観的で論理的な方法によって発見・解明することを目標としてきた。

そこでは、人間が生物学的要因、個人的要因、社会・文化的要因にもとづく存在であり相互的な影響の中で生活していることを認識することが重要である。さらに、種々のできごとの心理学的側面に関して科学的アプローチにより得られた情報を適切な手法を用いて分析し、その結果から因果関係を見出すことが必要となる。その上で、心理学における各種理論や手法を実際の社会生活の中で活用できることが求められる。

そこで、心理学教育における学士力の到達目標として以下の3点を考察した。

第一に人間の心や行動が、生物学的要因、個人的要因および社会・文化的要因の影響を受けていることを理解できること、第二に人間の心や行動に関わる現象の要因を科学的な手法を用いて明らかにできること、第三に、心理学的理論や手法を自己および社会の諸現象の理解に応用できることとした。」

なお、学士力に関する三つの到達目標それぞれ {下記(1)} については、次回委員会において吟味検討し、改訂することとなった。

以上